

セーフティネット医療※

※重症心身障がい、筋ジストロフィーを含む神経・筋難病、結核などの、他の医療機関ではアプローチが困難な分野の医療



結核治療の最前線

治療から社会復帰までトータルサポート

結核を正しく知ってほしい

「結核に対して誤解が多い」呼吸器治療専門の近畿中央胸部疾患センターの鈴木克洋医師はそう語ります。



結核菌を吸ったら必ず発病するものではありません。免疫機能により体内に入っても菌を殺したり、封じ込めたりしてほとんどの人が発病しません。日本では大半の患者さんが高齢者ですが、これは免疫機能が低下し、若い頃に封じ込められていた菌が悪さを開始したから。一方、若い方でも抵抗力がなくて発病する場合があります。

「結核菌の完全な封じ込めに2年ほどかかるため、この間に若い人でも発病の可能性はあります」

また、発病するとすぐに隔離が必要と思われるかもしれませんが、患者さんにも咳やくしゃみなどで菌を出して（排菌）しまう方と、そうでない方がいます。結核は肺だけの病気と思われるがちですが、肺以外の臓器や骨が結核になることもあります。排菌してしまうのは呼吸器系の結核を発病した人です。つまり、結核病棟への入院が必要となるのは前者の一部であり、後者は通常外来治療だけなのです。

結核は薬で治る病気

「結核は“死の病”ではなく治る病気」そう口をそろえて断言してくれたのは、東京でも有数の結核病棟をもつ東京病院の大田健院長と呼吸器専門の医師お二人です。



昔は“療養第一”といわれていましたが、かなり重症化してからの発見でもない限り、今では結核の薬（抗結核薬）による治療だけで完治できる病気になっています。ただ、治療全体には平均で6～9カ月ほどかかります。このうち入院は排菌の心配がある2か月程度で、その心配がなくなれば退院して薬による外来治療だけが続けます。ただ、結核の薬は10種類くらいあって、患者さんの状態に応じて代表的な3～4種類を使うことが多いのですが、患者さんによっては副作用を伴うこともあります。

「副作用と退院後の確実な薬の服用。こうした問題には医師と看護師、それに薬剤師も加えたチーム医療で対応します」と大田院長。



退院後を見据えた看護を実践

東京病院で患者ケアにあたる看護師の共通した認識は「退院後を見据えた看護の大切さ」です。



退院後も長期の薬の服用が欠かせない結核では、結核に対する正しい理解と服薬がより重要になります。東京病院では、入院中は状態を改善するための栄養サポートチーム（NST）や呼吸サポートチーム（RST）により、多職種と連携しながら患者さんの状態管理に努めると同時に、退院後を見据えた支援も行っています。



例えば DOTS（ドッツ）の実施。これは看護師および薬剤師の目の前で薬を服用してもらうやり方で、確実な服用を習慣に

してもらうための方法です。また、薬の副作用についても、看護師や薬剤師がその症状をいち早く見つけ、医師にフィードバックして薬剤コントロールにつなげています。さらに、保健所（医療機関は発症を確認すると自治体に届出義務がある）とも入院時から連携をとり、退院した患者さんについても、保健所との情報交換会でその様子を把握しています。



結核は日本社会の縮図

大田院長によると東京病院でも高齢の患者さんが多いが、若い患者さんの半数程度が外国人といいます。また、多剤耐性結核（結核の薬に抵抗性をもった結核）の場合もあり、母国で治療を受けていたものの中断してしまっ、薬への抵抗力をもってしまったと考えられる方もいます。

「結核と診断されて即入院となり、混乱する外国人も。慣れない日本での突然の入院なので精神的なサポートも必要です」と東京病院の看護師。保健師や地元自治体の担当者など、さまざまな人が生活全般を支援するのも、セーフティネットとしての結核治療の特徴です。



結核は“社会の縮図”、この例えは二つの病院の医師・看護師共通の認識です。外国人も含めた社会的弱者に比較的多く、日本が抱える大きな問題を写し出す鏡でもあります。結核に対し正しく理解し、誤解や偏見を持たないことが大切です。

なお、「2週間以上、咳や微熱が続くような場合は、念のためX線撮影が可能な呼吸器の診療科がある病院で早めの受診を」と鈴木医師。

国立病院機構の役割

国立病院機構の全143病院のうち48病院に結核病床があり、そのほとんどが都道府県指定の結核の入院医療機関です。全患者数の約40%が機構の病院で治療を受けており、社会的弱者を含めたセーフティネットの役割を果たしています。同時に、多剤耐性結核などの実態調査や治療法研究、患者減少により症例に触れることが減った若手医師への研修など、一体となって結核医療の取り組みを継続しています。

■ 東京病院（東京都清瀬市）



結核治療では都内有数の知名度を誇る同病院だが、呼吸器系以外にも消化器や循環器医療にも注力し、現在では地域医療の中核病院としても知られる。緑豊かな広大な敷地を誇り、急性期から緩和ケアまで幅広い医療を提供している。許可病床数 560 床（うち結核病床 100 床）。



環境の良さを象徴する、子育て中のカルガモのお母さん（中庭にて）。

■ 近畿中央胸部疾患センター（大阪府堺市北区）



国立病院機構では珍しい呼吸器疾患の高度医療専門施設で、特に肺がんの手術件数では近畿トップクラスを誇る。呼吸器感染症や慢性呼吸器疾患などの治療はもちろん、結核ワクチンなど新しい薬剤開発にも積極的に取り組んでいる。許可病床数 385 床（うち結核病床 60 床）。



感謝がにじむ患者さん手作りのスタッフ似顔絵。